

# 仲上健一教授を送る

立命館大学政策科学部長 重 森 臣 広

今年度をもって仲上健一先生が定年退職される。先生は、1988年、本学経営学部にも助教授として赴任され、教授昇任後の1992年、立命館大学政策科学部設置委員会事務局長に就任された。政策科学部の「建国の父たち」の一人である。社会科学分野の研究と教育の刷新を目的に、ご自身がそうであるように、広く環境科学、都市計画など工学分野の視点をも組み込んだ新しい学部の創設にかかわった先生が退職することは、残念この上ない。

工学分野ご出身の先生のご業績について、私自身、まとめる能力をもたないが、気候変動、温暖化、水資源管理、そしてサステナビリティ学の構築へと広がるその視野は、人間とその生の根源に迫る点で一貫しているように思われる。ご担当された科目も、交通環境経済、資源論、エコビジネス論、環境経済システム論などへ広がる。工学分野に身をおいたことのない素人が誤解をおそれずにあえていえば、先生のご関心はつねに、環境破壊や稀少資源の偏在といった人間の苦境を克服する「有用な知識」の生産にあったのだらうと思う。そのために先生は、学問分野を相互に区分する境界線を踏み越えて、工学から経済学、経営学、そしてときには政治学の「区画」にさえ、踏み込んだしなやかな考察を続けてこられたのだと思う。そして、もう一点、先生がお書きになった（とくに学生向けの）文章には、政策科学が何であるか、あるいは政策科学が何ではないのかを熱心に語る部分が必ずある。政策学、総合政策学、政策科学と呼称はさまざまであるが、大きな発展可能性があるだけに、未完の学問でもあるこの分野を開拓したお一人であればこそであろう。

このような先生のご研究のスタイルは、広く学界でのご活躍にもみてとれる。1983年に水資源・環境学会理事、2007年に政策情報学会会長、2009年に国際公共経済学会会長、2010年に社団法人サステナビリティ・サイエンス・コンソーシアム理事、2012年には環境技術学会副会長を歴任されている。こんにちの世界が直面する政策課題を見据えた学術活動の先頭にたってこられた。学術研究のあり方をつねに刷新し、グローバルな視点で再構築する知性を体現してきた人物は先生をおいて他にはないのだらうと思う。

それだけではない。24年間の立命館大学での足跡を振り返ってみると、先生のご活躍は、そのまま立命館大学、学校法人立命館の発展の軌跡であることがわかる。先生は、開設間もな

い政策科学部の執行部役職を歴任されたあと、1996年、立命館アジア太平洋大学設置委員会事務局長に就任された。立命館アジア太平洋大学は、いまや日本の大学のなかで、グローバル化を牽引するリーディング・ユニバーティティとして注目を集めているが、その構想段階ではその革新性を見抜いていた人々はそう多くはなかったのではないか。そういう状況で、先生は開学直後の立命館アジア太平洋大学に移籍され、教学部長、学長室長、副学長職を歴任され、新大学を見事に軌道にのせた。この偉業はまちがいなく学校法人立命館のターニングポイントをなす。その後、2007年に立命館大学に戻られて以降も、国際機構長、学校法人立命館常務理事をつとめ、大学および法人の発展にご尽力をいただいた。

広い学識、豊かな経験、革新的なビジョンをおもちの先生は、まぎれもなく私たち政策科学部教職員の大きなよりどころであったし、今後は、立命館大学名誉教授・政策科学部特任教授として、いましばらくは別の角度から政策科学部を見守り、ご支援いただければと願うばかりである。

最後に改めて、本学部教職員・学生を代表して、これまでのご業績をたたえ、またご苦勞をねぎらい、政策科学部の発展にご尽力いただいたことに感謝の意を表したい。

2014年3月